

II 実践例及び提言

1 幼児教育

幼児教育は人格形成の基礎づくりを担う役割をもっている。誰もがその重要性を認識しているにもかかわらず、一方で、「小1プロブレム」は幼児教育の自由保育に問題があると指摘されたり、幼児期の発達を無視した保育が行われていたり、子育てに喜びがもてず放任や虐待の実態があったりなどの現状が見られる。乳幼児にとって温かい信頼関係の中で子育てや教育を受け、人格の基礎となる「自らを律する心」を育てるには、大人はどのような実践をすべきか考えたい。

(1) 幼児教育の役割

① 幼児教育は生涯にわたる人間形成の基礎を培う役割

幼児教育は幼児同士による集団の形成、教育的意図をもった環境の設定、専門性を有する保育者の適切な援助のもとで、豊かな経験の機会が保障されることにより、生きる力の基礎となる人間形成の基礎を育成する役割が求められる。この普遍的な役割とともに、家庭や地域の機能が低下していることから、保育者には家庭を支援しつつ、協働して子どもの心身の発達を促す今日的な役割も求められている。

② 発達課題を保障する役割

生涯学習体系を考える際に基本となる理念は発達課題を保障することである。発達課題はハビガーストやエリクソンによって導入された用語で、人間が社会的に健全に幸福な生活を生涯にわたって送るようになるには発達の各段階（乳幼児期、児童期、青年期、壮年期、老年期）で獲得しなければならない固有の課題があることを指摘している。その課題を省略したり飛び越えたりすれば、以後の発達に何らかの歪みが生じやすくなる。各段階の課題をクリアするためには、その時期にふさわしい生活を十分にすることがなにより大切である。

ここではエリクソンの乳幼児期の発達課題について述べる。

乳児期、幼児前期は信頼感、自律性の獲得であり、幼児後期は自主性の獲得が課題である。

老年期							統合性・絶望
壮年期							世代性・自己陶酔
成人期						親密・孤立	
思春期					同一性・同一性拡散		
児童期					勤勉性・劣等感		
幼児期後期					自主性・罪悪感		
乳児期							
幼児期前期	信頼・不信	自律性・恥・疑感					
エリクソンの心理・社会的発達段階（前者は課題、後者は危機）							

(2) 近年の子どもの育ちがおかしい—幼児教育の課題—

子どもを育てる上で幼児教育がいかに重要であるかは「幼児教育の役割」で述べてきた。しかし、近年、子どもの育ちがこれまでと違って何かおかしいと言われている。中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」（平成17年1月28日）では、幼児教育の重要性について国民各層に向けて広く訴えている。この答申では以下の点について子どもの変化を指摘している。

- ・基本的な生活習慣の欠如
- ・コミュニケーション能力の不足
- ・自制心や規範意識の不足
- ・運動能力の低下
- ・小学校生活への不適応
- ・学びに対する意欲・関心の低下

これらは、幼児教育関係者の努力により改善されつつあるが、依然として課題である。とりわけ、本研究の主題である「自らを律する心を育てる」に係る自制心や規範意識の不足は一層危機的な状況が増して喫緊の課題となっている。文部科学省の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、暴力行為やいじめなどの問題行動等は一向に減らずいじめの認知件数は大幅に増加している実態が見られる。児童・生徒の問題行動は、もとをただせば幼児期の問題でもあるといっても過言ではないであろう。

以上の実態から、根源となる乳幼児期における養育や教育が如何に重要であるかを大人がこれまで以上に認識する必要がある。

(3) 国の役割

平成18年の改正教育基本法には「幼児期の教育」という条項が加えられた。幼児期の教育の重要性と国や地方公共団体の責務が明示された。

<教育基本法>

第十一条 幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない。

また、翌年の平成19年には学校教育法も改正され、幼稚園が小学校以降の学校教育の始まりとして位置付けられるとともに、幼稚園の目的・目標が法律において明示された。国が幼児教育の重要性をこのような形で明記したことは画期的なことである。

<学校教育法>

第二十三条 二 集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自立及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと

教育基本法、学校教育法の改正を受け、幼稚園教育要領も平成21年に改定され、領域「人間関係」の「内容の取扱い」に次のことが新たに示された。

- ・幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること。
- ・協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること。
- ・互いに思いを主張し、折り合いをつける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること。

(4) 乳幼児期における重視すべき課題

改訂された教育基本法、学校教育法では、これまでの普遍的な理念は継承しつつ、規範意識を大切にすることや、伝統と文化を尊重することなどを明確化しており、徳育の推進が示されている。徳育は人が人として社会で生きていくための共通のマナー、ルールを守ることや他人を思いやるなどの道德性を有している。幼稚園教育要領においても「折り合いをつける体験」や「きまりの必要性などに気付く」「自分の気持ちを調整する力」など道德性を培う点が強調された。

その徳育については、平成21年9月の子どもの徳育に関する懇談会報告「子どもの徳育の充実に向けた在り方」(P.16 参照)で、乳幼児期の子どもの発達において重視すべき課題として以下の事項を取り上げている。

- 愛着の形成
- 人に対する基本的信頼感の獲得
- 基本的な生活習慣の形成
- 十分な自己の発揮と他者の受容による自己肯定感の獲得
- 道德性や社会性の芽生えとなる遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実

これらの課題は、遊びを通して総合的に発達をとげていく幼児期の特性から「自らを律する心」に関することのみを取り出して育成するのではなく、乳幼児期においては、遊びを十分にし、総合的に養う取組の中で育成していくことが大切である。

(5) 課題解決に向けて

では、乳幼児期においてどのような実践を図っていくことが解決につながるのだろうか。

① 愛着の形成

愛着は生後半年から1歳半くらいまでの間に形成される母親あるいは主となる養育者と子どもの間に形成される絆といわれる情緒的結びつきをさす。

家族の絆には、夫婦の絆、親子の絆、きょうだいの絆がからみあっている。そのなかで、親子の絆の基礎になるのは、家族の絆の母子限定版といえる乳幼児期の愛着関係である。乳幼児期は母親など特定の大人との継続的な関わりにおいて、愛されること、大切にされること

で情緒的な絆（愛着）が深まり情緒が安定し、人への信頼感を育んでいくが、特にスキンシップは大きな役割を果たすと言われている。乳児はこの信頼に満ちた母子関係を経験し、母親への信頼と愛情を土台にしながら、様々な人々への愛着の対象の輪を広げていく。

このように愛着の形成は家庭において母親との関わりを中心に父親との関わりの中で形成されてきた。しかし、仕事をもつ母親が多くなり出産後の仕事復帰が早い場合は、家庭以外の養育者との間にも形成されることが多くなった。とりわけ、家庭以外の養育者では保育所における保育士がその役割を果たすことが多い。

では、保育士は愛着の形成を図るには、どのような保育を展開することが望ましいであろうか。

ア 乳児期の保育を充実させること

乳児期の保育の充実が愛着の形成のポイントである。乳児期には次のような保育者が望ましい。

- ・身体的・情緒的なケアをしていること
- ・子どもの生活の中における存在として持続的・一貫性があること
- ・子どもに対して情緒豊かな関わり方をしていること

イ 特定・少数の保育士が一人の子どもに継続的に関わること

特定の保育士との間に、緊密で継続的な関係性を構築していくことが、子どもの健全な発達にとって重要であるということが、愛着理論から得られている。一人の子どもに入れ替わり立ち替わり担当するという体制をとることはできるだけ避けたいものである。

② 人に対する基本的信頼感の獲得

26 ページで示したエリクソンの発達課題においても、人が人生のもっとも初期の段階、つまり乳児期に取り組むべき課題としてあげられているのが「基本的信頼」の獲得である。

基本的信頼には自分への信頼と他人への信頼の二つの側面があると考えられている。エリクソンによると、自分への信頼は、自分の意思に基づいて自分の身体が動くという経験により、また、他人への信頼は、自分の意思や要求を表したときに身近な大人がそれにこたえてくれるという経験により育まれるという。つまり、信頼感の獲得は乳児期だけの課題ではなく生涯にわたって求められる課題でもある。

次の事例は2年保育4歳児の事例である。

事例1：先生は約束を守ってくれた

学級全体で教師と一緒に音楽テープに合わせてダンスをしていた。みんな楽しく踊っていたが、後ろで踊っていた二人の女兒はおしゃべりをしていた。

すると、教師はいったん音楽テープを止め、二人のそばへ行き「今、みんな何している？」と二人に聞く。二人は「踊っている」と答える。「二人ともおしゃべりしているけれど急い

でいること？」と教師は聞いた。すると一人が「この後一緒に遊べるかお話ししていたの」と言う。教師は「仲良しの二人だからおしゃべりしたい気持ちは分かるけど、このダンスが終わったらおしゃべりできるからね」と諭した。二人は納得し、みんなと一緒に再び踊り始めた。その後の時間に、遊びの相談していたことは言うまでもない。

このように幼稚園や保育所では、些細なできごとでも、律することを指導できる場面がある。二人の女兒にとって教師は注意するだけでなく、おしゃべりしたい気持ちを受け止めてくれ、ダンス後に忘れないで時間をつくってくれたという教師への信頼も培われたものと思われる。

子どもは教師が自分の思いや話に耳を傾けてくれることを望む。「先生、あのね」と言って来たとき、けんかをして訴えに来たとき、そうせざるを得ない何かがあったのではないかという視点をもって子どもと関わると、子どもの声が聞こえてくる。「先生に自分のことが分かってもらえた」と感じたとき、子どもの中に元気がわいてくる。この「受容経験」や「承認経験」が信頼感の発達を促す要因の一つである。そして、信頼感は根底に親や保育者からたっぷり愛情を注がれ「自分は愛されている」という実感が大切であり、この実感こそがその後の人生にもつながることである。

③ 基本的な生活習慣の形成

今、「早寝、早起き、朝ごはん」のキャッチフレーズが盛んに取り上げられている。子どもは体を動かして生活していれば自然と早く寝るものであり、早く寝るから早く起きるのであり、早く起きるからお腹がすき朝ごはんをいただく。この当たり前の家庭における基礎的な生活能力を養う基本的な生活習慣（食事、睡眠、排泄、清潔、着脱）が学校教育を中心に重視されている。このことは、子育ての基本ともいえる基本的な生活習慣のしつけが家庭において疎かになっていることの表れと言える。

幼稚園・保育所は家庭で育てられた基本的な生活習慣を土台にしながら、幼稚園・保育所という社会的な環境の中で、自己抑制、順番、思いやり、譲り合う態度など生活習慣の社会化が行われ、自立がより確かなものになっていく場である。しかし、国立教育政策研究所生徒指導研究センターがまとめた『生徒指導資料第1集（改訂版）生徒指導上の諸問題の推移とこれからの生徒指導』（平成21年3月）でも、「家庭や地域社会における教育力の低下に伴って、子どもに対して基本的な生活習慣や社会規範などが身に付いておらず、そのことが問題行動等の背景・要因となっていることが指摘されている。」と示されている。

このことから、発達段階に応じて身に付けておかなければならない基本的な生活習慣が十分に身に付いていないことが、その後の子どもの問題行動につながっていきやすいことをしっかりと認識する必要がある、基本的な生活習慣の形成は、幼児教育の課題の一つである。

ここでは、特に重視したい基本的な生活習慣を取り上げ、その支援について述べる。

ア 生活リズムを整える。

生活スタイルの多様化に伴い、夜更かしして生活リズムが乱れがちな子どもが増えて
いる。親の都合で動かさず、生活リズムの確立が子どもの育ちにとっていかに大切であ
るかについて保護者会等を通して啓発を図る必要がある。

イ 自立心を育てる。

幼児期は依存を基盤として自立に向かう時期である。子どもが自分でやろうとする気
持を大切に、時間がかかってもできた喜びを味わわせることが大切である。このよ
うな経験が全ての習慣の獲得や自信につながっていく。

ウ 集団のきまりを守る意識を育てる。

幼稚園・保育所は集団で生活する場である。みんなで気持ちよく生活するためには、
自分勝手な言動は許されない。しかし、近年、規範意識が低下し、挨拶ができなかつた
り、集団の中で話が聞けなかつたりする子どもが見られる。このきまりが守れない状況
については大人の在り方を指摘する声もある。子どものモデルとなる大人が求められる。

④ 自己肯定感の獲得

「受容経験」や「承認経験」が信頼感の発達を促す要因であるが、これらの経験をたっぷ
り受けた子どもは自己肯定感も育つと言われている。しかし、国際比較では日本の子どもの
自己肯定感の低さが際立っていることが指摘されている。

思春期になると自己意識と他者意識の高まりから自己否定や自己嫌悪に陥りやすく自己肯
定感が低くなると言われているが、幼児期から「自分はAちゃんより走るのが遅い」「鉄棒の
前回りができない」「製作が苦手」など人と比較し、自己否定する姿が見られる。幼児期は積
極性の獲得の時期であり、のびのびと自己発揮をする中で自己肯定感が育つのである。

次の事例は3年保育3歳児が先生に認めてほしいとかかわる姿である。

事例2：先生、見て、見て！

A児が先生のそばに行き「先生、見て、見て！」と言ってくる。先生はその男児を見るが、
A児が何を「見て」といっているのか分からず、「なにに？」と言う。それでも男児は「見
て、見て！」と言う。先生はしげしげと全身をくまなく見る。すると男児の右足が数セン
チ床から上がっていた。それに気が付いた先生は「すごい、片足で立てるんだね」と少し
大きな声で手を叩きながら言い、認めた。嬉しそうな顔の男児は「これも」と言ってケン
ケンをした。先生は男児を抱きしめた。すると、それを見ていた他児たちが「ぼくもでき
るよ」「わたしもっとできるよ」とその周りでやってみせた。

このように、3歳児にとって片足で立つ、ケンケンをするという行為は、それができると
なると嬉しくて誰かに見せたい思いでいっぱいである。初めは片足で立つことであった

がそれが認められると更に難しいケンケンまで披露し認めてもらう。一つできた達成感が次の達成感へとつながり、自分はできるという自己肯定感を得ていく。幼児期の自己肯定感の育成には「ほめられる経験」「認められる経験」を十分に経験させたいものである。

⑤ 遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実

子どもにとって「遊び」は身体機能の健全な発達のみならず、遊びを通して様々な実体験をし、「自主性」「社会性」「創造性」を育む営みである。また、人との関わりを通して養われる「協調性」や「連帯意識」など、子どもの成長に欠かすことのできない要素も含んでいる。とりわけ、幼児期は、遊びを通して感覚を働かせ、いろいろな刺激をうける。遊びを通して運動をする。遊びを通して想像し、ものを作る。遊びを通して他の人との関わり方を身に付けるなど遊びを通して成長している。遊びの大切さを認識してのびのびと遊ばせたいものである。

しかし、現在、幼児を取り巻く環境の変化から「三つの間」と言われる「時間、空間、仲間」が減少しており、遊びの機会が獲得しにくくなっている。また、幼稚園や保育所において遊びと称している活動においても、幼児がのびのびと表現し自由感を持って遊ぶ活動になっていない保育が見られる。「三つの間」を大事にしたいものである。

次の事例は3年保育5歳児の色水遊びの事例である。

事例3 緑のグラデーションだ！

B児は登園するなり、友達に「昨日のつづきしよう」と言って誘い、色水遊びをする。赤、青、黄色の小さく切ったクレープ紙を使って単色の色水や混色した色水を作り楽しんでいった。きれいな色水が出来ると友達同士見せ合い、作り方を教え合っていた。次にB児は黄色の色水を作り、その色水を10個に仕切られた薬が入っていた透明のケースに分けて入れた。1ケースの量は少量である。次に青の色水を作り、スポイトを使って黄色の色水を少しずつ10か所に入れた。すると、緑の色水が次々にできた。それは、どれも同じ緑ではなく、濃淡がついた緑の色水であった。はじめから意図して作ったものではないのでそのきれいな色水に驚き、「緑のグラデーションだ！」と言い、周りの友達に見せていた。

登園から2時間たっぷり遊んだ中での経験であった。

5歳児はこれまでの先行経験を生かして遊びに取り組む。色水遊びは試したり工夫したりして取り組む活動である。試したり工夫したりする遊びはたとえと遊ぶ時間の確保と工夫できる材料の提示が必要である。そして、それを認めてくれる友達がいるからこそ時間も忘れて満足感をもって遊べたものと思われる。こまぎれの保育の中ではこうした充実感は味わえない。

次の事例は3年保育5歳児の相談場面の姿である。

事例4：Cちゃんはさっきも友達に譲ってあげたね

乗り物ごっこを展開していた5歳児である。グループの友達6人と一緒に乗り物を作った後、係を決めていた。動かす係、切符を売る係、誘導する係、アナウンスする係などが

あった。リーダーとなる女兒が「何の係になりたいか、やりたい係のところ指を指そう」と言った。合図に合わせて一斉に指した。ところがアナウンス係に人気集中してしまった。するとC児が「いいよ、僕、違う係になるよ」と言った。その日はC児が譲ることで遊びが進んでいった。

翌日、再び係決めをした。C児は再びアナウンス係を指した。この日も、アナウンス係に人気集中した。C児がこの日も「僕、代わる」と言った。すると、リーダーとなる女兒が「Cちゃん、昨日も譲ってくれたじゃない。今日は譲らなくてもいいんじゃない？」と言った。周りの子どもたちも分かっていたようで女兒の発言にうなずいた。

このように、幼児であっても5歳児ともなると子どもたち同士で解決する力をもっている。保育者はことがスムーズに運ぶように口を出してしまいがちであるが、子どもたちの力を信じてじっと見守り、待つことが大切である。このような体験が自信につながり、自立心、自律心が育つものと考えられる。

(6) 提言

① まず、心と体の基礎をしっかりと築こう！

子どもの健やかな発達のためには、乳幼児期の育て方はとても大切である。

幼児教育は心情・意欲・態度を育てる教育である。しかも、一人一人の発達の特徴に応じた指導を重視した教育である。一人一人が人への信頼感を基盤にして情緒の安定が図られ、「自分をいつも愛してくれる人がいる」「自分は大切な人間なんだ」「自分からコトをおこしていいのだ」そして、「自分が自分らしく過ごしていいのだ」という気持ちをもてるようにすることが大切である。つまり、幼児教育は家づくりで言うと家の土台をつくることであり、土台が十分でないとその上の階がぐらついてくることは明白である。

これらのことを家庭においても幼稚園・保育所においても大切にし、子どもの心にしっかりと築いていくことが重要である。

② 遊びを再考し、遊びの充実を図ろう！

幼児教育において重視する事項の中で一番大切なことは、遊びを通しての総合的な指導である。幼児期の発達の特徴から幼児教育は環境を通して行うことを基本としている。幼児はその遊びを通して発達に必要な経験を築いている。たっぷりと、時の経つのも忘れて遊ぶ中で、達成感、充実感、満足感、挫折感、葛藤などを経験していくのである。したがって、遊びを軽視せず、遊びの重要性を大人は認識する必要があり、遊びを再考することを切に願う。自らを律する心の育成は遊びを通して総合的に行う幼児教育がスタートであるから。